

共立女子大学博物館所蔵－資料名「各種 名物裂」に関する研究： 作品概要

古川 咲

はじめに

共立女子大学博物館（以下、「博物館」とする）は、学園の創立130周年を記念し新2号館が建設されたのを機に新設され、平成28（2016）年10月に開館した。本学の収蔵品の中心となるコレクションは、江戸時代から昭和初期にかけての小袖・着物類を中心とする日本服飾、及び18世紀後半から20世紀初頭にかけての西洋服飾である。また、これら以外にも、江戸時代の大名調度を含む漆工芸品や、アール・ヌーヴォー、アール・デコ期のガラス工芸品等も収蔵している。これらの多種多様な収蔵品は、教員のための研究資料として、あるいは授業のための教材として収集されたものである。そのため、当初これらの資料は、これを活用・利用する各学部・学科や研究室で保管・管理がなされていた。しかしその後、教員の退職や研究室の移動などをきっかけとして、これらの資料は学園で一括して管理されるようになった。そして、博物館設立と共にこれらは博物館の所蔵品となったのである。

これら資料が入手された当初は、研究室等において調査研究やその活用が行われ、資料に関する学術的な情報が資料に付随していたと考えられる。しかし現在では、上記の経緯を経て保管庫に収蔵されている資料の多くは、入手時期や購入価格などの最低限の情報を残すのみで、学術情報はほとんど伴っていない。

そこで博物館では、このように学術情報を伴わないまま、保管庫に長らく保管されてきた資料の調査研究を行い、展示や本紀要の発行を通じて、得られた情報を広く公開していくことを重要な責務と考えている。

今回はこのような未調査資料のうち、比較的早い時期に本学所有となっていた資料名「各種 名物裂」（資料ID：341）を調査研究の対象とした。

なお、本調査・研究には、丸塚花奈子（共立女子大学家政学部被服学科染織文化研究室助手）と古川咲の2名が当たった。

1、資料の概要と研究目的

昭和42（1967）年に入手された裂一式が今回の研究対象である。当時の記録によれば、「裂類（蜂須賀家所用名物裂）143点」とある。詳細は明らかではないが、家政学部被服学科の教育・研究資料として蜂須賀家の関係者から入手したものと考えられる。入手後、本学で台帳登録する際に資料名が「各種 名物裂」と変更され、博物館でも現在この資料名で登録がなされている。

現在この資料は、アルミニウム製の大きな箱（縦45.0×横76.0×深さ26.0（cm））2箱に収められており、明らかに本資料とは別ものと判断できる資料も一部含まながら、未整理の状態では保管がされてきた（図1）。

従って、本研究では、まずこれらの資料群を分類・整理し、全体像を把握することを目的とした。分類・整理にあたっては、①裂の種類、②裂の形状、③裂に付けられていた紙札の3つの観点より作業をすすめ、これらの裂一式がどのような性質をもつものであり、どのように使われていたか（用途）についての検討・考



図1. 保存されている箱
（縦45.0×横76.0×深さ26.0（cm））

察を行った。また、本資料群は現在「名物裂」という資料名で登録がなされているが、この資料名にふさわしい資料群であるかどうかについての検証も行った。

2、名物裂について

2-1、定義

前項で本資料が「各種 名物裂」と表記されていることから、まずは「名物裂」の定義について確認しておくこととする。

「名物裂」の定義については様々な説がある。長崎巖の「名物裂の概念の成立と需要の実態」（『共立女子大学総合文化研究所紀要』、21号、2015、pp.45-74）において、「名物裂」の定義についての整理がなされており、以下にそれを示す。

今日、「名物裂」として一般的に規定される要件は、次の通りである。（1）①基本的に海外から何らかの方法で日本にもたらされた舶載の染織品（舶載裂）であり、②その舶載時期がおおむね14～17世紀頃（室町時代～江戸時代）であること、及び③それらの用途が茶道と深く関わる染織品（主に茶道具の袋や包み、掛幅の表具）であること、とされる。つまり、①種類、②時期、③用途の3つの要件が揃った裂が今日一般に「名物裂」と呼ばれるのである。

しかし、実際にはこの他に、この一般的な規定を基準としながらも、他の要素を加えて更に限定して規定する場合と、一般的な基準よりも緩やかに規定する場合の2つの定義が存在する。

前者においては、一般的な要件を満たした上で更にそれぞれ異なる下記の要件を加える。

【限定した定義】

- (2) 茶会記や茶道書に固有の名称として裂の名が記されている物だけを「名物裂」として規定するもの
- (3) 『古今名物類聚』の「名物切之部」に記載されているものや、他書において「名物」あるいは「名物裂」として集録されているもののみを「名物裂」として規定するもの
- (4) 大名物・中興名物と呼ばれる茶入れに付属している物だけを「名物裂」として規定するもの

一方、後者においても、以下の3つの場合が見られる。

【緩やかな定義】

- (5) 茶道具に関連するものに限らず、14～17世紀頃にわが国にもたらされた外国染織品を広く「名物裂」と規定するもの
- (6) (5)に加えて、流入した時期の上限を7～8世紀まで引き上げたり、下限を19世紀まで引き下げたりしたもの
- (7) 茶道に用いられた裂地であれば、舶載裂でなくとも「名物裂」と規定するもの ただし、これには舶載裂を模して国内で織られたものや、舶載裂と同様の技法を用いてこれに似た模様を表したものに限るとされる。

このように「名物裂」に関する定義は、様々であり、必ずしも一本化されていない現状にある。

従って、本稿では一般的な定義に加え、緩やかな定義も「名物裂」の範疇として捉え、考察をすすめていくこととする。

3、調査結果

本学に入った際の記録によれば143点の裂が存在したとあるが、今回の調査では145点、計138種類の裂が確認された¹。これらの裂の多くは、墨書のある紙札(図2)が布端に付けられていたり、白い和紙の包み紙や茶色の封筒(図3)の中に収められていたりしている。中には紙札が裂から脱落し、紙札だけ、裂のみで存在するものもある。

なお、蜂須賀家所用であったことを示すものとして、「蜂須賀様」との記入がある畳紙(図4)や風呂敷(図5)、罫線やマス目の入った原稿用紙2種類(図6、7)等が資料中より発見された。

3-1、裂の種類について

表1でわかるように、調査した145点の裂中、最も多かった裂の種類は「金襴

1 本調査では収納される箱ごとに調査を行ったため、同一裂であっても異なる箱から出てきた場合は別の調査番号を付与した。また、原則収納されている順番、束ごとに調査を進めたため、同箱内に収められている同一裂であっても、別の束にあってたり、紙札が別につけられていたりした場合についても別の調査番号を付与した。



図2. 墨書で書かれた紙札



図3. 茶色の封筒



図5. 風呂敷(部分)

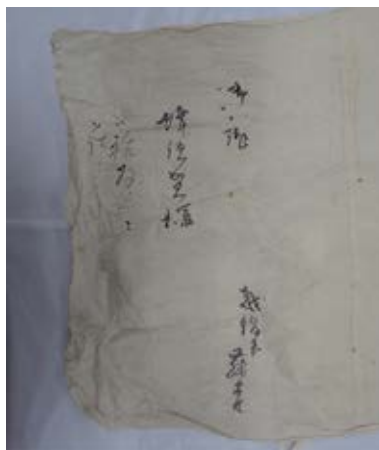


図4. 「蜂須賀様」との記入がある畳紙(部分)



図6. 罫線の入った原稿用紙



拡大(図6)

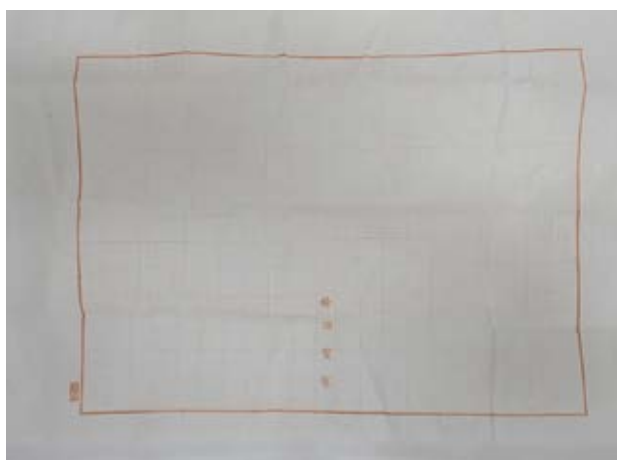


図7. マス目に入った原稿用紙



拡大(図7)

／銀欄」であり、41点(40種類)である。次いで「緞子」が36点(33種類)、「錦」が22点(20種類)である。数が多い「金欄／銀欄」、「緞子」の2種類で全体の半数以上を占め、それに錦を含めるとおおよそ全体の7割に達する。

これら3種類よりも点数ははるかに少ないが、「繻珍」7点、「風通」6点、「繻子」5点、「革」5点が本資料に含まれている。また、「縞」、「海気」、「木綿」、「ビロード」はそれぞれ3点ずつある。

ここで、本稿で扱う裂の定義を示す。

【金欄／銀欄】

地組織に金糸あるいは銀糸を絵緯として織り込み、模様を織り出したもの。

【緞子】

一般的には、繻子組織の織地に裏組織で模様を織り出した紋織物を指すが、本稿では繻子組織でなくとも、先染した経糸と緯糸を用い、地と模様を異組織で織り出したもの(広義の緞子)も緞子に含める。

【錦】

2色以上の経糸または緯糸の浮き沈みによって模様を織り出した織物。

【風通】

表を構成する糸と裏を構成する糸を模様の部分で交差することで、表裏色替わりに同じ模様を織り出した織物。

【縹珍】

縹子組織を地組織としながら緯糸に多色を用いて模様を表した縹子地の錦。

【海気】

経糸、緯糸に染色した異なる色を用いた平組織の絹織物。

なお、経糸、緯糸の色を変えず、同一色で織られた平組織の絹織物は平絹とする。

【縹】

異なる経糸または緯糸を配列して布面が筋模様を構成する織物。

【ピロード（天鷲絨）】

地組織に加え、経糸または緯糸で輪奈（ループ）を作っている織物。

【羅紗】

平織に織られ起毛された毛織物

本資料に含まれる裂の種類を概観すると、前述の通り、模様を表した紋織物類が圧倒的に多い。また、本資料の登録名に「名物裂」とあるように、名物裂で代表的とされる金襴・緞子が数の上で上位を占めている²。しかしながら、今日の「名物裂」の定義に含まれない、革³や羅紗といった染織品が含まれている点は注目される。特に、羅紗等の毛織物は、金襴・緞子と同じく14～17世紀に日本にもたらされた織物であり、当時舶載染織品として高い地位を占めた染織品であった。武家の陣羽織や火消装束、町人や武家の装身具（筥迫や煙草入れ）等によく用いられた織物であったが、鮮やかな色味（緋色・黄色等）や特有の質感のためか、毛織物類は茶の世界にはほとんど受け入れられることがなく、名物裂に含められなかった染織品の一つであった。そのため、本資料中にこれらが含まれていたということは、特徴的であるといえる。

以上、資料の分類より確認できたことは、本資料は紋織物中心の裂類であるということ、そして上位を占めているのは「名物裂」で代表的な金襴・緞子であるということである。ただし、一般的には「名物裂」に含めない革や毛織物も含まれていることから、この裂が収集された時期における「名物裂」の概念をうかがうことができる。

2 現在「名物裂」の種類としては、名物裂の普及に大きな役割を果たし、名物裂の一つの底本をなすと考えられている、松平不昧編纂の『古今名物類聚』（寛政元（1789）年～寛政9（1797）年）に基づき、「金襴」、「緞子」、「問道」、「雑載」の4つに分類される。「雑載」には、風通、錦、印金、海気等が並ぶ。

3 革については、一般的な「名物裂」の定義には含まれない染織品である。しかし、元禄7（1693）年刊行の菊木嘉保編纂『万宝全書』（美術・茶道に関する百科全書）「古今和漢書道具見知鈔」の目次には「廿九 古今織物時代之色々」、「卅 印傳唐革之色々」とあり、金襴や緞子等の織物類とは別に革の染織品が紹介されている。よって、このことから近世中期頃までにおいては、革も茶道具に使用するものとして扱われていた可能性も考えられるが、ここでは現在の名物裂の定義に従って取り扱うものとする。



図8. 布の一部分が四角形に切り取られている裂
①グループ



図9. 布の一部分が不定形に切り取られている裂
①グループ



図10. 小片の裂 (グループ②)



図11. 織耳 (織生地 の両端部) しか残されていない裂 (グループ②)

表1. 裂の種類について

種類	点数(種類)	調査番号
金襴(銀襴)	41(40)	2,20,21,23,28,29,31,35,36,37,38,41,44,45,56,81,94,95,97,100,103-1,103-2,105-1,106,108,124,125,126,127,128,129,130,131,132,133,134,135,137,138,139,142
緞子	36(33)	1,3,4,5,14,15,17,18,19,22,24,39,40,42,46,47,53,54,58,60,64,71,72,78,79,80,102-2,105-2,112,113,114,115,120,121,136,140-1
錦	22(20)	16,30,33,48,49,51,55,57,59,61,62,63,70,82,84,85,86,87,88,96,104,117
錦(縹珍)	7(6)	50,52,83,98,99,110,111
風通	6	6,34,43,77,107,109
縹子(縹子/刺繍含む)	5	65,67,102-1,(116),119
革	5(4)	7,11,12,13,123
縹(間道)	3	27,32,118
海気	3	66,73,122
木綿	3	76,91,92
ピロード	3	89,90,93
羅紗	2	8,9
麻	2	25,26
平絹	2	69,75
紗/刺繍	1	10
振織	1	68
綴織	1	74
交織	1	101
頭文紗	1	141

3-2. 裂の形状について

裂はその形状から、大きく以下の3つのグループに分けられた。

最も多いのが①裂の一部分が切り取られていたり、あるいは切り抜かれたりしているグループである(以下、①とする)。切り取られたり、切り抜かれたりしている部分は、布端から半ばまでや布の中央等に見られ、またその大きさや形も様々で、四角形がほとんどであるが、丸形や不定形に切り抜かれているものもある。(図8、図9)。

2つ目は、①のような切り取られた痕跡のないグループである(以下、②とする)。このグループに属する裂は、①のものに比べ、大きさが比較的小さいものが多いことから、①から切り取られた側の裂であったり、切り取られた部分を切り揃えた裂である可能性が考えられる。また、①と②に属する裂には、共通して一辺が2-3cm程度しかない小片の裂や、織耳(織生地 の両端部) しか残されていない裂も見られる(図10、図11)。

3つ目は、もともと何らかの用途のためにその形を形成し、使われていた痕跡を残すグループである(以下、③とする)。例えば、調査番号076「紺木綿地裂」(図12)、調査番号073「萌黄平絹地裂」(図13)は、裂の形状から元の用途を推測できる。前者は袴であったものを引き解いたもの、後者は火消装束の胸当ての裏地として使用されていたと思われるものである。その他このグループには、何に使用したかについては明らかでないが、布の一部が縫われていたり、かつて縫われていた針穴が残っていたり、また一度使用した際の折り跡や留め具等を残した裂

も含まれる。

以上、残された裂の形状からは、③の一部を除いて、当資料に含まれる裂類が具体的に何に使用されていたかを特定することはできなかった。ただ、①、②のグループの様子から、これらの裂は、何らかの用途に使用するため、集められていた裂類であったことが考えられる。また、縫製してあったものを綺麗に解いたり、織耳や小片の状態であるにも関わらず、大切に保存している点からは、裂を大切に保管しようとする、管理上の配慮がうかがえる。

特に、小片となった裂は、これ以上に使用することができない大きさであるにも関わらず、丁寧に1枚ずつ和紙に包まれていたり、封筒に収められていたりしている。このことから、これらの裂についていえば、大切に保管する事だけに意識が置かれていたと考えられる。

なお、裂の裏面には裏打ち紙が貼り付けられているものも多いという特徴が見られる。裏打ち紙が当てられた裂には、糸の痛みが激しいものも多く、経糸あるいは緯糸の一方のみが残り、布としての原型をとどめていないものも見られる。従って、この裏打ち紙についても、裂のこれ以上の損傷を防ぐために施されたと考えられる。

このように、裂の形状からは、本資料には、過去において何かに使用したものと、将来使用するためのものがあり、更にもうひとつ、保存するために残された裂も混在していることが明らかとなった。ただし、後者については、保存するためだけに収集された裂と、当初は使用するための裂であったが、その用途を終え、保存することになったもの、の2種類に分類することができる。

③紙札について

調査した裂の多くには、数種類の紙札が布の端等に付けられている。付けられている紙札は、紙札の大きさ、記載されている内容、書き方の違いから数種類に分類することができる。紙札についての詳細は、本号所載の丸塚花奈子『共立女子大学博物館所蔵-資料名「各種 名物裂」に関する研究：裂に付される紙札について』において詳しく述べることにし、ここでは紙札に書かれた情報を部分的にとりあげるに留める。

紙札に記載されている内容は、裂の種類によって違いが見られるが、番号、名称（種類）、重量（匁・分）、そして、「古渡」、「中渡」、「近渡」⁴ というような裂の舶載時期や、「極上」、「上」、「中」、「並」、「下」というような裂の格付けを示すと思われる言葉が記されている⁵。また、極く少数ながら使用した際の用途と思われる情報も確認することができる。以下では、それらの用途について検討する。

調査番号017「紅地花唐草模様緞子裂」は、もともと47.5×63.6cmであったところから、19.5×32.5cmと28.0×13.5cmほどが切り取られた裂であるが、この裂に付けられている紙札には、「天目／袋／遺」との記述がみられる。この記述から、欠失した部分が茶碗の仕覆に使用されたことがわかる。

調査番号066「紫平絹地裂（海気裂）」は、筒状に巻かれた状態で保管されているが、状態が悪いため、裂全体を引き延ばすことはできない。しかし、一部分を広げただけでも、様々に切り取られた痕跡を確認できる。この裂についても、「第三百三拾三号／紫白海気□□／□ち茶器ノ□僅二用ヒル□□一／三十一匁」との



図12. 調査番号076「紺木綿地裂」（グループ③）



図13. 調査番号073「萌黄平絹地裂」（グループ③）

4 この分類は舶載された時期を示したものである。「古渡」は室町時代中期、「中渡」は室町時代中期～末期、「近渡」は近世初頭とされるが、それぞれの時代区分が漠然としており、その根拠は明らかとなっていない。

5 裂に対する格付けは、近衛家旧蔵の裂手鑑にも見られる。本作品には「上」、「中」、「下」の3段階で格付けがなされている。



図 14. 調査番号 078「茶地唐花唐草模様緞子裂」と裂を巻いていた反古紙

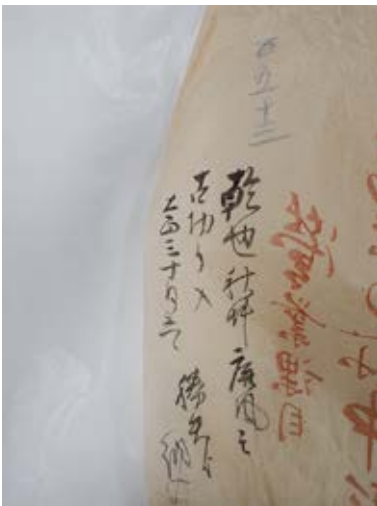


図 15. 裂を巻いていた反古紙の文字書き

記述がある紙札が付けられている。詳細については不明だが、調査番号 017 と同様、切り取られた部分は「茶器」すなわち茶入れの仕覆などに用いられたと考えられる。

この他、調査番号 110「茶地菊花入菱繫模様錦裂」と調査番号 130「茶地木瓜様金襴裂」には、「十四年六月十四□ / 御茶入御用遣」、「十四年六月十四 / 天目臺御入用遣」の紙札が付けられており、これらの裂も茶道に関係して同時期に使用されたことがわかる

さらに、調査番号 045「鶉色紵地羽団扇葵模様金襴裂」と調査番号 104「花色地捻花変わり菊模様錦裂」には、それぞれ「一号二階袋棚小襖」、「一号二階書院地袋」との記述がある紙札が付けられている。「袋棚」とは「(1) 床の間や書院の脇、違い棚の上部に壁から張り出して設けた戸棚。(2) 茶道に用いる茶棚の一種。志野棚に模して桐で作ったもの」(『日本国語大辞典』より)のことである。また、「地袋」とは「床の間のわきの違い棚の下などにつけた小さい袋戸棚」(『日本国語大辞典』より)とある。従って、この裂はともに違い棚の上や下に設けられた戸棚の襖に使われた表具裂であったと推測される。

最後に、調査番号 078「茶地唐花唐草模様緞子裂」は、16 枚の大小様々な四角形に切り分けられた裂である。これらの裂は、「浅子染物店」と書かれた反古紙に包まれていた(図 14)。この紙の反対面には、「乾也秋艸屏風之 / 古切り入 / 大正三 十月六日 / 勝矢より / 納入」との記載が見られ、この面を表にして裂が包まれている(図 15)。各裂の端には、約 5mm 程度の黒ずんだ跡が見られることから、これらの裂はもとは屏風の表具裂に使われていたもので、大正 3 (1914) 年に表具裂を新調する際に、別途保管されることになったものと推測できる。

以上のように、裂に付けられた紙札から、これらの裂は、茶道における諸道具の袋や、戸棚の襖や屏風等の表具として使われていたと考えられる。同様に、大小様々な大きさや形に切り取られていた前項紹介の裂類も茶道に関連する品々に使用された可能性を想定できる。それゆえ、本資料は第 2 項で確認した「名物裂」の用途に関する条件も満たす裂であることが明らかとなった。

また、調査番号 078 の事例より、このような裂の収集・保管は大正時代まで行われていた可能性がある。ただし、調査番号 078 の裂には、紙札が付けられておらず、紙札を付けた時代とは時間のずれがあると考えられる。

4、考察

本研究では各種裂の実態を明らかにすることを目的として、①裂の種類、②裂の形状、③裂に付随する紙札の 3 つの観点から考察を進めた。

その結果、本資料は紋織物を中心とした 16 ~ 19 世紀にかけての各種裂であり、形状、および紙札に記載される情報から、衣服や茶道具の袋や包み、及び棚の襖や屏風等の表具裂として使用された裂類であることが明らかとなった。そして、これらの情報を集約すると、一般的な「名物裂」の定義より包含する時代の範囲は広いものの、裂の種類と用途の点から、これらの裂は、本学の所有に帰した際の台帳記載名称の通り、「名物裂」としての性質を有する裂類であるといえる。それは、紙札に記載される情報に「古渡」、「中渡」、「近渡」等の名物裂と関係が深い言葉が含まれている点からも裏付けられる。

しかしながら、本資料の内訳と保存のされ方に注目するとこれらのほとんどが

名物裂に分類されるものであるとはいえ、一般に名物裂の範疇には入れられない革や毛織物類が含まれていることから、稀少な裂を集め、保存することに主眼が置かれていることがわかる。

一方、使いかけの裂がたくさんあることから、もともとは使用するために収集・保存がなされていたが、その後、知識を得るためや研究、鑑賞するための裂として保存・管理する方向に意識が変わっていったと考えられる。

桃山時代に茶の文化が大成し、江戸時代に茶の世界に適した金襴・緞子といった一部の裂が良いとされるようになり、「名物裂」というジャンルが確立するとともに、裂を手元に置き、賞玩するという意識が高まっていった。

やがて近世後半になると、舶載時期にこだわり、格付けの行為を行うなど、裂についての知識を深め研究するための蒐集が行われ、裂に対する意識が変化していったと考えられる。それは、裂の小片を丁寧に貼り込んだ「裂帖」や「裂手鑑」が江戸時代後期以降にたくさん作られていることから明らかである。これらの「裂帖」や「裂手鑑」は、大名家や豪商家において、作成されたものである⁶。当初の記録に「蜂須賀家所用」と記されていた本資料も、形式は異なるものの、そのような意識のもとで、格付けを行った紙札を付けたり、裏打ち紙を貼ったりしたものと考えられる⁷。

そして、その意識は、使用後の余り裂や使われた裂をほどいたものも含めて蒐集の対象としているように、更に純粋に古い染織品を蒐集するという意識へと向かったものと考えられる。その証拠に大正時代に収集・保管されたと思われる調査番号078「茶地唐花唐草模様緞子裂」の紙札には、「古切」と書かれている。この記載からは、「名物裂」という意識よりも、純粋に古い裂を大切なものとする価値観のもとで、使用されていた裂でさえも剥がして大切に保管しようとする意識が感じられる。

このように、裂の内容やそれらの保存のされ方からは、本資料が近代以降の人々の裂に対する考えが強く入り込んだ資料群であり、「名物裂」に定義されるものよりも、広い要素をもつものであったと結論づけられる。そして、この意味において、本資料は、近代以降の人々の染織品に対する価値観や、近代における「名物裂」の概念をうかがうことのできる貴重な資料群であるといえる。

謝辞

本稿をまとめるにあたり長崎巖教授（当館館長、共立女子大学家政学部被服学科教授）には、終始にわたりご助言を頂きました。心より感謝申し上げます。

6 大名家のものには前田家、徳川家、毛利家旧蔵のものがあり、豪商のものには江戸時代の豪商冬木家、三井家旧蔵のものがある。現存する「名物裂帖」、「名物裂鑑」については、五島美術館学芸部編『名物裂 渡来織物への憧れ』「名物裂・六手鑑」において詳しく取り上げられている。

7 資料中、裂には付けられていないが、調査番号053「茶地緞子裂」と同じ和紙から出てきた紙札には「明治十三年五月改 / 中 紋カイキ / 黒川極」（下線部筆者）との記載が見られた。よって、本資料においても裂に対する格付けのような行為は近代に行われていたといえる。また、「明治十三年五月改」とあることから、明治13年以前において付けられた紙札があり、その後本紙札が明治13年に付けられた可能性が考えられる。

凡例
 ・「/」は改行を示す。
 ・「□」は判読不能の文字・□は「文字」を示す。
 ・「(株)」は判読不能の文字・□は「文字」を示す。
 ・「(株)」は判読不能の文字・□は「文字」を示す。
 ・「(株)」は判読不能の文字・□は「文字」を示す。
 ・「(株)」は判読不能の文字・□は「文字」を示す。
 ・「(株)」は判読不能の文字・□は「文字」を示す。

通し番号	調子番号	作品名	種別	数量	世紀	大きさ (分子×分母cm)	裏打ち 紙	《A》名新付き紙札 13.1×3.0	《B》番号・押目付き紙札 7.5×2.4 5.3×2.4	《C》「唐吉」名入り紙札 11.7×3.1	《D》「黒川屋」名入り紙札 13.2×2.7	《E》匿名番号付き紙札 19.1×5.0	《A》～《E》以外の紙札	その他
1	1	茶地折花鳥唐草様紙子製	紙子	1	18-19	8.0×108.4			四拾六号/中/紋二重/五分七分					
2	2	茶地牡丹唐草様紙子製	金襴	1	18-19	不:36.5×63.0								
3	3	調子番号014と同様/浅葱地花蝶様紙子製	紙子	3	18-19	不:31.0× 72.5/23.0× 38.0/5.0×27.3		近邊鳥様紙子/廿三番/押地唐 草色紙子/押目 十七列四分		和物/十四列五分/縹?子/亀吉	□口/下/百十八号/縹子/黒川 屋			
4	4	紅地黒字入り丸紋様紙子製(打散か?)	紙子	1	18-19	不:188.0× 114.0				中邊/縹?子/亀吉	百三十三/中/縹子/黒川屋	ち丸/中邊/縹子/縹地裏丸/縹 目八拾壹列		百廿三号/縹子/縹地/八十八列
5	5	花色地鳥獸波様紙子製	紙子	1	18-19	不:41.4×44		近邊鳥様紙子/廿四番/中四番/ 縹目四分三分/縹地花色小紋様						
6	6	白茶地花鳥工様紙子製	黒通	1	18-19	不:65.4×36.0	●			和物/百十五(株)/風通/亀吉	百□口六(株)/口/風通/黒川 屋			
7	7	調子番号123と同様/立涌様紙子製	革	2	18-19									
8	8	縹々縹縹紗地製	羅紗	1	18-19	不:13.0× 15.0/6×11		縹々縹 百六十九番/廿七 列四分三分/縹八列八分/縹色 □□□□□□□□						和紙:十九番/百七列/縹々縹/ 小行目□□□□□
9	9	縹々縹縹紗地製	羅紗	2	18-19	37.0× 38.0/37.0× 38.0								
10	10	薄茶紗地蝶鳥草花蝶様紙子製	紗/刺繍	2	16-17?									
11	11	萌黄地鳥漢	革	1	18-19	幅50		番号:第六号/座/部/黒通草 式切/縹目八列六分						
12	12	茶地縹製	革	1	?	不:14.5×29.0								
13	13	黒地縹製/仕	革	2	18-19	9.5×6.2/幅18 ×丈72.0		四番/八幡屋/押目直方口分						
14	14	調子番号005と同様/浅葱地花蝶様紙子製	紙子	2	18-19	19.0×2.5/5.0 ×丈28.0								
15	15	薄茶紗地八重紗縹唐草様紙子製	紙子	1	18-19	23.6×81.5	●		三百貳号/縹線/四列九分					
16	16	浅葱地縹唐草様紙子製	綿	19	18-19	-			三百五十六					
17	17	紅地花唐草様紙子製	紙子	1	18	不:47.5×63.6		近邊鳥様紙子/廿三番/手縹子/八 一番/縹地本(紅)縹紙/縹目/丈 拾六列四分六分						
18	18	縹地大紋様紙子製	紙子	1	19	不:149.0×61.0				和物 百八/縹子/三十四列/縹 吉	百七/下/縹子/黒川屋	大四/近邊/縹子/縹地/押目 縹目三十四列四分		天目/袋/遣
19	19	茶地小花入縹縹紙子製	紙子	1	18-19	不:45.4×43.5	●							
20	20	紫地世鳥唐草様紙子製	金襴	6	18-19	-								

通し 番号	調査 番号	作品名	種別	数量	世紀	本寸 (分子×分母cm)	裏打ち 紙	《A》名刺付き紙 13.1×3.0	《B》番号・題目付き紙 7.5×2.4 5.3×2.4	《C》「龍首」名入り紙 11.7×3.1	《D》「龍川」名入り紙 13.2×2.7	《E》匿名番号付き紙 18.1×5.0	《A》～《E》以外の紙 その他
21	21	緋緋唐草模金襴裂	金襴	1	18	22.0×5.6		中近藤織子地織金入/百十五番 楕目六分	第四拾番号/七分	七十五/並/金龍/黒川楯			
22	22	黄地牡丹唐草模緋緋子裂	緋子	1	18-19	不:21.0×7.5		近藤織子/楕目五分/八番/ 御地黄茶社丹唐草	六拾二号/並/緋子				
23	23	薄茶地草模金襴裂	金襴	6	18-19	1.6×10.8/2.9 ×6.9/2.7 13.6/2.8× 17.6/3.4× 35.3/9.2×17.8	●						
24	24	濃黄地燕丸模緋緋子裂	緋子	5	18-19	不:42.5×25.5	●						
25	25	緋緋裂	麻	1	18-19	69.0×8.4							
26	26	紺緋裂	麻	1	18-19	17.10×7.0							
27	27	白地緋模緋裂	緋(間道)	2	18-19	6.7×6.3/12.5 ×8.0		口か4.5/L1.5から4.4/上三 十八番/御小切二ツ/楕目二 分				和紙:上/百八十四五番(朱)/三 拾八番/楕目五分六分/口口三 分/糸ししらかんどう/三切/黒重 襴版改	
28	28	白地金襴裂	金襴	1	18-19	5.1×3.2	●		番外七号/三分			緋須賀裏紙/番外七号/緋金	
29	29	白地牡丹唐草模金襴金襴裂	金襴	1	18-19	9.5×3.3	●		第八十四号/口卷切/五分				
30	30	紺地緋模緋裂	緋	3	18-19	22.0×60/3.9 ×2.7/25.5× 1.1		和物屋織子地紺地/十六番 /楕目一十八分/御地紺花襴版		下口/口三/楕目/三切一 分二分/黒川楯			
31	31	花色地蔓花模緋緋裂	銀襴	1	18-19	2.5×3.8							
32	32	紺白茶紅地緋模緋緋子裂	緋(間道)	1	18-19	60.5×1.2							
33	33	濃黄地緋裂(模様不明)	緋	3	18-19	不31.1×4.5/4.5 ×6.4							
34	34	納戸地花鳥/宝尽くし模緋緋裂	烏通	3	18-19	47.0×6.0/26.5 ×2.9/8.8×3.2	●		第八拾号/烏通/三切/烏/楕目上 和物一ツ九分/				
35	35	黄地金襴裂(模様不明)	金襴	1	18-19	5.0×6.5			第六十五号/四分				
36	36	萌黄地龍模金襴裂	金襴	1	18-19	10.7×4.7		藤切緋/五十八番/楕目名物 丹或青龍/御地萌黄/楕目五分 二分				紙袋:五拾八番/百十四六十五/ 楕目名物丹或青龍/御地萌黄 金入/楕目一ツ四分/黒重襴版 改	
37	37	緋緋蔓花模緋金襴裂	金襴	1	18-19	11.5×1.3		下近藤織子地織金入/百十三番 楕目/五分四分				紙袋:中/百拾三番(朱線)/百四 十八号(朱)/下近藤/楕目地織 金入/楕目一ツ四分/黒重襴版 改	
38	38	緋緋花并散らし模金襴裂	金襴	4	18-19	14.0×14.5/8.0 ×13.7/6.5× 6.5/9.0×21.0		近藤金入/六十五番/御地九堅 緋金箱花/楕目七分				紙袋:六拾五番(朱線)/式口式 口(朱)/定置金入/楕目七分/黒 重襴版改	
39	39	黒地牡丹唐草模緋緋子裂	緋子	3	18-19	-	●					式口号(朱)/左糸(朱線)/四 切三分一分/近藤少/黒地實?口 楕目楕目/楕目七分	
40	40	茶色石畳龍丸模緋緋子裂	緋子	3	18-19	28.1×17/38.7 14.0	●		第八拾七号/二分			四拾七号 中緋子	

通し調査 番号/番号	作品名	種別	数量	世紀	大きさ (タテ×ヨコ×cm)	裏打ち 紙	《A》名称付き紙札 13.1×3.0 黒鉛筆体藤巻金入/百九番/黒 鉛筒代有龍金入/拵目 一列九 分	《B》番号・拵目付き紙札 7.5×2.4 5.3×2.4	《C》「龍画」名入り紙札 11.7×3.1	《D》「黒川程」名入り紙札 13.2×2.7	《E》匿名番号付き紙札 19.1×5.0	《A》～《E》以外の紙札	その他
41	白地角龍模様金襴製	金襴	1	18-19	9.5×6.5								
42	萌黄縞子地花唐草模様紙子裂	紙子	1	18-19	16.0×4.0		第四拾貳号/九分						
43	白地茶巾第五様風通製	風通	1	18-19	15.6×1.8	●	第拾七号 二切/九分						
44	白地丸丸模様縞製	縞縞	1	18-19	11.5×2.6		近邊白地縞入/四十一番/御地 白織紋/拵目 巻外四分						
45	藍色紗地羽回蘭家模様金襴製	金襴	3	18-19	14.05× 7.0/12.0× 9.8/74.8×7.0	●						一号二階巻細小襷	
46	薄茶地花亀甲唐草巻文字模様紙子裂	紙子	1	18-19	24.3×13.4		大拾四号/下 六列/拵子/二為 一分				大六/近邊り拵子/花色縞/巻巾 半八列五分		
47	間草番号07と同製/黄色地唐花鳳凰縞縞紙子裂	紙子	1	18-19	不30.7×6.5		古渡口/圓目/五十一番式 百?十号(朱)/御地蔵/巻目式 身白巻外七分						
48	間草番号057と同製/緑白段唐花唐草縞縞紙子裂	縞	2	18-19	13.5×2.6/19.8 ×3.6		近邊縞縞 中邊外ヒ/銀/六十番 /御地蔵 三切龍花縞子/拵目式 外口分						紙袋:口第百二番(朱)/六拾 番(朱縞)/近邊口第中邊外ヒイ ノ目 巻外五分/巻外二分/ 龍草縞縞製
49	①紺地鳥縞縞縞製/②茶地花縞縞製	縞	1	18-19	1.0×20.2	●	第七十三号/二分						
50	黄色地花縞縞製	縞(縞珍)	2	18-19	11.5×3.5/3.7 ×2.1				中邊/武百口一号(朱)/龍ヶノ/ 巻目/清水切				
51	紺地鹿鹿鳥縞縞縞製	縞	1	18-19	9.5×6.2		明細縞馬鳥/吾四十八番(朱 縞) 拵目 巻外九分五分/百六 十						
52	茶地縞縞縞縞製	縞(縞珍)	1	18-19	4.6×12.5		中邊縞子地金入茶地縞紋/百三 十号 拵目 巻外五分/内九列 脚口影口口口口口						
53	茶地縞子裂(模様不明)	紙子	1	18-19	幅12 長33.2	●	第六十九 二分					(調査番号053ともに出ているた 紙札、おそらく違う製法の紙札):① 明治十三年五月改/中 敵カキ /黒川程 ②中邊縞縞縞縞子/九 列 拵目 巻外六分/巻外七分六 (朱) 拵子/巻目/電目/三分	
54	間草番号115と同製/紺地馬子縞縞縞紙子裂	紙子	2	18-19	5.7×13.5/5.6 ×4.6	●	五十五 五分						
55	紺白段縞子縞縞縞製	縞	3	18-19	不:21.0×21.0								
56	白地縞縞縞縞縞製	金襴	1	18-19	4.0×1.8	●							紙袋:三拾九番(朱縞)百五十八 (朱)/六十三(朱縞)/第七二七 十/八(朱)/近邊口かんと口/和勝 ノ目 巻外五分/巻外五分/巻 ノ目 巻外五分/五分/近邊/縞 縞縞縞縞製
57	間草番号046と同製/緑白段唐花唐草縞縞縞製	縞	1	18-19	7.2×7.1								
58	花色地縞子裂(模様不明)	紙子	1	18-19	2.4×12.0								
59	茶地縞縞縞縞縞製(模様不明)	縞	1	17-18	2.2×7.6	●							

通し調査 番号	調査 番号	作品名	種別	数量	世紀	大きさ (タテ×ヨコ×マチ)	裏打ち 紙	《A》名称付き紙札 13.1×3.0	《B》番号・押目付き紙札 7.5×2.4 5.3×2.4	《C》「亀吉」名入り紙札 11.7×3.1	《D》「黒川種」名入り紙札 13.2×2.7	《E》所名番号付き紙札 19.1×5.0	《A》～《E》以外の紙札	その他
60	00	花色地小花模様紙子裂	紙子	1	18-19	20.7×5.2								
61	01	黄紅縹段小菱模様紙裂	錦	2	18-19	平: 24.5× 5.3/6.5×1.0								
62	02	紺地花入斜格子模様紙裂	錦	2	18-19	長77.8 幅 9.0/3.6×7.3								
63	03	紺地蓮華模様紙裂	錦	2	18-19	13.8×4.6/14.2 ×11.1								
64	04	白地紙子裂(模様不明)	紙子	3	18-19	61.7×7.0/60 ×6.7/2.2×6.8	●							包み紙:三(巻)/白口字第百六 号(朱)/並 紙子/四分
65	05	紅地紙子裂	紙子	5	18-19	幅5.1		第二三三号/六八八分						
66	06	紫平絹地裂	海気	1	18-19	-		第三三三号/紫白漣気口 口茶器ノ口僅二用ヒル口 一/三十一号						
67	07	濃茶地紙子裂	紙子	1	18-19	-		百七十七号/備江口獅子丸/三 十五号六分					百七十七号	
68	08	振籠反物(一反)	振籠	1	18	幅34.0		第三百六号/武十一号四分						包み紙:第百二十二/津張子/ 八十八号
69	09	紅平絹地裂	平絹	1	18-19	49.0×45.4		三号八分/武百武拾五号						
70	70	茶地獅子入丸紋模様紙裂(用途不明)	錦	1	17-18	平:長223.0 幅 6.0		(他の裏の紙継りの可能性有)① 第三百六号/口十一号四分、② 第三百三拾八号/白又布/六十 八号					書き取り不能/毛ノ	包み紙:第百拾六号/十六号 四分
71	71	調査番号047と同裂/黄色唐花鳳凰模様紙子裂	紙子	1	18-19	100.0×1.0								
72	72	紅地唐草ノ字ノ入模様紙子裂	紙子	1	18-19	9.5×30.0								
73	73	萌黄平絹地裂(元・火州染草介)	海気	4	18-19	-								
74	74	海茶地雲龍模様紙裂	綴織	1	18-19	35.0×38.0		三百六号/古金欄						
75	75	白平絹地富士模様紙裂	平絹	1	19	100.0× 44.5/68.0× 46.0								
76	76	紺平絹地裂(元は袴か)	木綿	7	18-19	94.5×35 他								包み紙:口籠/口の内、金三圓
77	77	花色地雲龍模様紙裂	風通	1	18-19	18.0×46.5		中渡/百十九/風通二切/亀吉		名八/中渡ツツ/茶地雲角/内 角/押目式内三号九分				
78	78	茶地唐花唐草模様紙子裂	紙子	15	18-19	-								包み紙:乾也秋申再風之/古切り 入/大正三 十月六日/勝兵士/ 納入
79	79	黄色地三ツ白模様紙子裂	紙子	1	18-19	18.50×61.0								製菓三ツ口 口外リテ口 口十三口
80	80	白地雲巻七宝模様紙子裂	紙子	1	18	60.7×65.6		中渡/紙子/亀吉		名八/生瀬山紙子/備茶巴才紋/ 壓目三十五号(巻)/百二十九				よせ近渡り紙子/白地輪蓮/壓 目十号九分
81	81	紺地牡丹菊模様紙裂	綴織	1	18-19	69.8×7.3		百十四・二切/口即/備置/亀吉 同断/六号六分/黒川様						れ七/活瀬山巻入/花色五号兼口 口(備置?)/壓目口口口

通し番号 調査番号	作品名	種別	数量	世紀	寸法 (タテ×ヨコ×タリ)	裏打ち 紙	《A》名新付き紙札 13.1×3.0	《B》番号・押目付き紙札 7.5×2.4 5.3×2.4	《C》「龍舌」名入り紙札 11.7×3.1	《D》「黒川屋」名入り紙札 13.2×2.7	《E》匿名番号付き紙札 18.1×5.0	《A》～《E》以外の紙札	その他
104	白地銀襷製	銀襷	1	18-19	不:209.5×53.6								
105	金襷製	金襷	1	18-19	28.1×46.6			武百武拾六等/三列				口金/口口口切/口口	
106	花色地捻花菱より菊模様錦製	錦	10	18-19	13.5× 40.0/33.5× 9.2/12.3× 10.0/9.5× 7.5/48.0× 3.0/46.5× 46.5/14.5× 2.6/47.3× 13.5/85.5× 2.6/51.7×2.6 (別冊7/65)								一号二階書院地袋
107	茶地雲様金襷製	金襷	1	18-19	165.8×89.1			百五拾一列/中/銀紗/黒川屋					
108	茶地花模様錦子製	錦子	1	18-19	52.5×64.6			百五拾一列/中/銀紗/黒川屋					
109	濃青地草花模様錦製	銀襷	1	18-19	124.5×17.8	●		和物/百四十四/紗金?/七列/ 電言					裏(裏面):丸十
110	①茶地菱より江模様風通製/②茶地梅花模様風通製	風通	1	18-19	159.4×55.0	●		拾号/中/風通/三十五列					
111	樹地鳥花模様金襷製	金襷	1	18-19	86.0×55.0	●							
112	茶地鳥雲唐花入丸紋模様風通製	風通	1	18-19	18.12×41.2	●		卅七号/並/風通/十八列					
113	茶地唐花入菱模様錦製	錦(縹紗)	2	18-19	87.8× 58.2/17.0× 31.9	●		拾五号/上/シチン/十五列八分					
114	茶地唐花入菱模様錦製	錦(縹紗)	1	18-19	55.6×57.1	●							
115	萌黄地折枝梅模様錦子製	錦子	1	18-19	34.5×61.6	●		真十二号/並/銀子/二切八列三 分 六角部分					
116	黄地下が唐丸窓文草心模様銀子	銀子	1	18	150.0×83.7								
117	花色地唐花入丸紋模様錦子製	銀子	1	18-19	42.5×46.5								
118	脚車番号054七河製/和地「勇」字模様銀子製	銀子	1	18-19	82.4×86.6								
119	黄帯子地風車模様製	錦子/刺繍	1	18-17	180.8×80.8	●							
120	紅地牡丹唐花模様錦製	錦	1	17-18	123.8×84.5	●							
121	茶地大格子小格子模様製	錦(間道)	1	17-18	113.7×88.4	●							
122	茶地錦子製	錦子	1	不:125以上 ×660									
123	黄地「勇」文字入り丸窓製らし室辰く模様銀子製	銀子	2	18-19	15.45× 32.5/193.0× 32.5	●							
124	和地文字室辰く模様銀子製	銀子	4	18-19	91.9× 34.0/35.3× 29.4/28.7× 28.0/117.7× 33.9	●							
125	茶平刺繍子模様製	海気	1	18	87.0×38.6	●							

Wedding costumes with blue ground

- Wedding costumes in the Edo period and succession of that tradition -

NAGASAKI Iwao

Abstract:

In the wedding costume, it is presumed that in the first half of the 18th century, a format was established in which uchikake (outer garment) of white ground, red ground and black ground were sequentially changed on white aigi (inner garment). Although these kinds of uchikake were given auspicious pattern regardless of the ground color, there is a blue uchikake which represents a pattern very similar to these, as a group. This article attempts to verify that such work is a wedding costume worn the fourth after the black one.

In Japan, the word "Ao"(blue) has etymologically been closely related to "Kuro" (black) , "Aka"(red) and "Shiro"(white), but on the other hand "Ao"(blue) is in an incidental position for these three colors, so even in wedding costumes.

It seems that the wedding costume of the blue which started its use around the middle of the Edo period had gradually been forgotten as the Japanese tradition was lost along with the progress of westernization since the Meiji Period.

Keywords: wedding costume, auspicious design, background color

Collection of Kyoritsu Women's University Museum

- Study of the work " various kinds of *Meibutsu-gire* textiles " : outline of the work

FURUKAWA Saki

Abstract:

This purpose of this study is to clarify the work outline of "various kinds of *Meibutsu-gire* textiles" (ID 341) in the collection of the Kyoritsu Women's University Museum, and to clarify the work outline of proceed three points of view of (1) type of cloth, (2) cloth shape, and (3) paper notes on cloth .

As a result, this work was made from 16th to 19th century with mainly textile fabrics, the textiles used as clothes, as tea ceremonial bags, as shelf sliding doors and folding screen. Therefore, as shown in the records of the ledger book, this work can be said to be a cloth that satisfies that requirement, although the range of the era will be wider than the definition of general " *Meibutsu-gire* " textiles.

However, from the point that the work includes a part of leather cloth and woolen fabric, which is not included in the range of the definition of general "*Meibutsu-gire*" textiles, and the point where the cloth after use waskept, it is thought that collecting was done based on the values of treating old cloth as important, regardless of "*Meibutsu-gire*" textiles. Since the act of collecting and storing such cloth is from modern times and thereafter, it was also revealed that this work reflects the idea of people's cloths since modern times.

Keywords: *Meibutsu-gire*